櫻の首途

天

七〇一

へ 5
1433
1

門 利
號 1433
巻 1

三冊之内

拾七

櫻のさ途

誹諧序詞

一朵舎 陶里

翁先人ハ正風をもて正門ニ今
風雅を探りて理ハ何とも言をも
さハ先万物自然の変化に随ふや
俳諧ハ花の雪ほとゝきす月に
吟し尽くしぬ 御句も尼
三十余年といふ歳をへてハ

己卯五秋二臘小六の井の
里主に父あると貴やかなりし
露くなる御代にて世ハ花人
なんと呼事しるを流ハ此よき
宮縫の法を知といひ堂に者母
いよゝくゝる世に寄くする志操
あれハ其事いふてなし　篤宗
なるの花に山かくも明雀鑑なる志

有て致仕の身も被寄ぬるより
いつのとしかん来ゝ屋の看主
なる兄　我任を譲るゝ所よの御縁
ありし雨周御かさく辞して
我独を慎ひらとまゝむ風雅ハ
みとしも　なんぞ我ゝの冠
きらんや嵩も金と祀へしと
文に従なるいふもなかりしゐ

旅人なくハこの名れ絶んことを歎
なげかひまどひ進退ゆきまどひ
いとし給ふところ〳〵花の命尽
随ひやられしありさまハ言ぬ
夫の落葉はちらひ松に峰る給
そぞろあはれをさそひ候を旅人
あはれ只その枕とせんことを歎
むかしの方もかみの様ハちらされ

南都の方へまうでゝ給ふと
旅寐もありしを享和まで
語の墨まゝらん給の筆の跡の
墓語しるせ八雲御作の
たぐひもかはりしくを紀の風すまで
物語の約りとさしと如月
中の旅をとめ給ふ給あかり
手仰やちられ流れてもるまで紛れ

従者もありし今新り御の
道をれふもそのさるをひとり
笠といふなる頭巾もあるれも
紛らう引た梅をみつ随分の
風も違せんと新年の首途に
脩添ひ門からの小提見送る人く
一日千秋のおもひなるみ祖の神に
わくやうて健なる綸子と今より紛らふのこ

百韻

旅ゆきむ月もかまやむかね旅　陶里
詠ひの懲に僅まくね春　長霧
檀存たあとふひ雨と下にみなみ　女学
蔵いゆきうと多れ嘯く　昌た
戸隠手れあ居く柏のうらうる見　周和
吟ふさるう交机のまふる　梅た
漏る月ものもきもいたふた　見雪堂
岩をくえ花水のさ夜く　子珍

ウ

有明をきらして茶摘合点　魯町

冬されハ播に樫の葉かる　免燈

何かりと姐樒乾く精進日　以交

雨きれしへ吹かくる風　游し

誰か座ね松の梢をかくる　知主

湯さへ酒にかふて慰ん　芳樹

先へ千代の汀の雀蒙衣　宗波

月もちるやら…の…　脱…

うやくしと見方ならし布の声　武…

性気の足な蔵の杖　佳樵

ちよ向ふ君の踏ム…　己風

面しと掛し給ふの旅籠　三江

梅咲て翁の魂に句人　㐂…

琴浮るゝに…かりしな　珠夕

ニヲ

こゝしまど…て…の山　逸…

鳥のもの付と舟へ吹く種　六…

ちらちらと香さへて梅の雨(?)　達也(?)
晴ては梅の中々(?)せかれ(?)　李紅(?)
見ん人に物を隔てぬ匂ひ哉(?)　仙桂(?)
ちる事は喧嘩(?)ふかき内(?)　淡江(?)
梅折戸の口ひらきける花(?)　枕也(?)
声揃へと朝鶏啼ふ(?)　玉龍(?)
また一里来るやこゝの内ならで(?)　隼枝(?)
笑梅(?)の花は会ぬ(?)もの(?)かれ(?)　西翁(?)

梅咲いて晴よく見ゆる佐保(?)かな(?)　白之(?)
朝(?)の茶(?)梅の香折ふし(?)くら(?)
咲くや此花の香匂ひ(?)　白雁(?)
雲梅の枝盛む(?)咲な(?)　松芥(?)
流(?)くひとり新春伸る(?)梅のかほり(?)　錦水(?)
鉢(?)へこのまゝ内の梅さく(?)　雲鳥(?)
宿(?)の梅(?)畑は小...(?)　旦咲(?)
風荒て神の梅(?)かな(?)　八蕉(?)

荊を住ふのゝと道一日〳〵暮れて　沾夕
うき瓶取てりの鄽あらひ　友交
伽羅の香も息情ぞ嗅もらぬ　鶯暁
秋蚕火ひくし盛ハるさり　見々よ
日の影谷中は達さつあの月　柳佐
露もる組をいふむさし野　和君
揚るは蕣矢捨ひし強くあらく　定一
浪うねくしとあ静かに　松女

夷ぞ貢物まるるぞれなば代　仙川
おのれへちくさ添る耕し　李園
ニヲ
ふるハとさて涅槃の寺参り　古宗
膳ニ二八の蕎麦切の筋　蔵才
橋ハやまさあれ文字あり　達岩
古秋のあれ檀林俳諧　二流
いまるる山の杖を捨し竜　杜川
常盤の月衣脩るえんく　梅下

栗の実の落れハ枇杷も色付　敦可
小雲も戸をさへ下ちる　栗六
揚てけり簾に隣へ寄る鶏　岐仙
指合ふ一剛ぞ中ふて添ハ　和近
着組の小口もあかし首の法　里乙
念仏の節句日に経お　九歓
月のおも一竜島越なり　文可
従闇も仮りふ旧里　西瓜斎

之ゆ

由良ぬ清汐くむ葉ぞ流れて　梅窓
江ぞ落る塩の絶ハ　牧子
篇遺ぞ修まてハ晴し出吹雨　桃之
大招延しも村中のうしく　旭志
鶴のをあらひ女子の姓しり　嗽石
忙との端とまる二方荒神　素文
言うしハ此漿の内も遠了似　流清
そよ吹と来る松の水音　龍泉

杯まへて笑ふも嬉し月の縁　菊貫
其途枝さしも霧忍ぶ客入　蝶紅
瓢箪ハ落てさへ紛の命くし　百猿
里を離し蝶の夢小家　こ女
飛ともしはらくをみるなり秋　呂朔
ひらり秀ぬとく雲の茎摘　里牒
名オ
口笛の呼ひ利て許も来ぬ　落笥
人を招さハし昔の張絹　太朔

嵩しく隠居を移く香具売　呂栄
浮気も人も知る血のたし　李逸
新宅里ハ去年に行縁ふ　文呂
ちりのんくらん極め松の木　志来
縄切れをえても荒て蛇さらい　蒼汀
打ての刈しれ薪の雨ニ丁　逸切
咲ぬのの絶れ信合の傘雨　乞渕
利体ハ字縫ハ若さてある　一瓜

飲て居る目先なこゝへ青蛙　苑之

出水ハことにぎやかに清　一扇

月落し谷川ハ手の多き沼の音　玉葉

子を捨る気も出て家の蛍に　杂蘭

立留の椽ハ金魚の下がる　仏伍

夕ふ八幾隔八小けし夏飯　介

出産の元ひ付る加茂　喰之

ころころ寄る鵞女の雪殺　多託

傘ハ何を引き馬よけて　来稚

雪の引しへ川とまり　葉夕

秋の夜ハ皆き紙の風情　梅二

山も守りて秋ふ門出　茶酔

名録

諸州の句ハ物数まで出て
四季ハ吟をとらん

行雁や歌ハ二日月の友　小方　子玲

軒下に蓑ハ乾かぬ標　陶里
鶯や啼の声のハつゝく竹の戸　素粋
魚の背も見ゆる柳の川　流清
瓦にも見へくりて落葉かな　湯之
若草や水の溜りハ消かくれ　三江
山の端に月ハ遅るゝ時雨かな　市子
小梅の宿や言の葉月哉　曉之
寺もの夕見ゆる木田哉　葵汀

月の夜や招かれてちる桜　一流
雨の夜や溜りにうつる鶯の護摩　古栄
菜の花や京の匂ひの焚　気隠
神さびて灯明の影さびし　呂翔
植込や鞠の調子もおのれから　久延　梅古
三幅の掛りかゝや蛙の聲　三ッ橋　文雪
印のとこを離して背戸ハ雪かな　之風
稲妻の棒をもちる家の苫　素蘭

隠さぬや野ハ朧なり朧月　上ノ条 江川
舟ゆるや汐をかける波を入りこく　宗叔 順清
海吉て霞ゆかし三井寺　西ノ 呂宮清
ちる花ハ信ぐかもえの小盃　如圭
まかれや山の奥にも秋の声　弘伍
秋引の信濃もえてりこ子　池田 柳渚
黄てりく葉にまけあかる花を　芦橋
咲ハ出かり人もこえかり橋の上　逸示

竜胆やよの花情て咲て居く　錦水
藤架や形れなまなゆや な　蕉郁
追ふ旅やさしかおもせ人ふ竜中　本田 沙暑
橋くく蕉菜の山や又ひとり　李遊
田植や水まえ杖花とり　尾池 赤水
蛙の子れもそのつて人る田植ぶ　川ア 佳橋
おの苗れ声のこかきる枯野かれ　浅草 友字
請ひ八千ふ間顔の生るや十六夜　文昌

鷹啼くや袖でとめんの大しぐれ　東波

梅雨晴や素麺釣ふ竹塀町　六識

出梅やあらはに乾ふ雨の軒　宗之

鶯なくや枝に移りて花すみか　集乃松

五月雨や樗小雨に這ふ雨蛙　なみ交

常ならぬやうに縁ある泉え　くら

子来の衣へそりと次ろ数きつ　条之の

山家には[illegible]れて桃の花　林よの

手枕にこの雁やうき宵月　可よ

枝にあるとしるきは竹の萩　海年

秋の夜やねられぬ浪の音　施之

菊花や植るや秋ひの雨静　旭志

野菊やゆるふてさらり中連　東稚

菅の軒捨てハ伸る柳かれ　和近

秋風しかねる松の作　如笠

吹くさひに軒の[illegible]の子　周和

松虫や琴のしらべにかよひ来　白暁
青田から見に映る川波の色　（冨永）磯夕
後ろから人なみよせて椿かな　嗽石
村雨や村ち晴れり蟬の声　左鈴
こころ飛ぶ小川照らして稲田かな　（井ノ泉）泡鶴
庭さきの子の寝所に行く暑さかな　鐸和
枝たわく篭かなて撫られ　嵐戈
榜鹿の手に浪まく小春かな　李和

涼風のうちこえて遠し大井川　之流
夕立や行袖さゆる浜の旅　魯竹
川流の影うつる風橋やをさき　（スイセタ）達石
古きもの捨て扇子を抛るか　桃五
涼風に雲ちる空や二日月　杜川
ひとりものせはしなく寝くらし冬の難　西舟
寝ぬ山よ雪霜の止みハ千鳥かな　季周
夕ぐれや名にしる楓今朝かな　（ホツコ）鵲花

何となや那須野ゝ果ハ雨あかり　（神戸）玉葉

菜畑の果ハ霞よかゝる宗　梅窓

むら〳〵降や竹の子つれ姿　似楮

藤の花風の柳とまかれけり　謝示

うたゝね桜京もし垣の月　太朔

小菊の赤み見せて冬かれ　宣宗

早乙女や泥手に掴む苗一把　（小里）桜虎

月こゝや二葉へゆる桜鯛　米粟

蝉の声や森に松よまる雨中　（五ノ里）貞友

稲妻はえ多ふるる二日月　（クロノ）深江

ちるるれ草に淋しさ梅の香　（古川）梅下

宿にう川添うも訓てさるほ　（野村）宜培

枕行を浮して知りぬ今宵の雲　敦の

村雨の晴てくや晴中雁　素文

遠山や時雨の雲に暮ゆけり　達磨

菜はうくなる雨渋く二秋月　（ちゑ）旦收

わらおもくして寝入けり　大河 里鏡
野ハ雛子の声もきれて八重桜　清水 畊仏
春雨や机にむかふものかな　漆 鶯暁
涼風の軒にせり出す雫かな　東野 只葉
雪吹巻かここて黒し鳰の海　里乙
咲さてハ浪花寝し初胡蝶　長渕
年よしはあちら家来移道哉　イセ 松茂
桜や又一物に繕を郭公　汝夕

五月雨や蓑てた搔が竹の陰　逸切
盃と添てゆくや涼しさ哉　之一
竹の子にかゝるやおれかゝひ哉　一吾
雨さへぬ諸月ならし土用干　桃之
涼風やもとハ森へ入うらみ　梅二
山を離れ雲と見えてて不二の雪　杖子
凡さかす縮りの梅尾なし　茶夕
若竹やまた人携ゆ雨の飛り　呼交

物言ぬ寄と行来の嵐哉　　横井　玉說

嵐見や月も氷て明すらん　　暁永　蕭风

首途

東西ハ独歩して諸人とまじハり坤地遊歩
にまよひて月をもやつれぬる他風雅のなさけもなき
我ハ官舎にありて事もなき寒気を送るのみ
俳諧ハ老後の友としてふと行末を詠しては艱難
紀の路の旅寝をおもひ出入る月さへ今ハ異なる
旅宿の宿をなかしくはるゝかくしてあり書もす
凡三十余年の間今ハ我身の秋とおもふて頭をかへ
九曲の紙子の袖なる薦の身にもなさけをしる
事と知りぬ此さかりハ雪月花水を筆にして

えらひ神仏の業を名所花の波のあはれたる
立て記録あるもあらしろ神と文字の安の
くくいなかりしく晏浦山の名とぬらし
かくられハ才と忘れ齢をあそひ一寸ん縁之作

さつひらき宍や千里ハ首藤　起樂坊

秋ゝ桜ハ霞分て見る花　文柳

大松加減婚姻の世話の内裏ん　恙亭

九天二枚の襖あけて見る　雨中

さつきや笧乾柳枝く月の夜　千流

烟りかくし鶴か浦る　斧川

雨里を流しりて寺ある前　其風

悲人月見る人のもとひ　守夕

青松緑切戸の框ありて見る　桂府

こゝのさのるく馬の転ひ　江子

法事ハ秋ゝ連衆のたち出て　湖文

海苔の吸ものさか本林な　巴夾

猶いやまさる嘆の泪は緑となりし　去微

雨はれて翁堂も陰　之蟲

ますれ名の辨ならむ泣かれや　前林

ゆかしく補よ領宜ふ篤　竹と

氏をふる中瀬家郷の秋なる　ある八

いろく蜘りて芦はなしれ　雨さ

あふれた桜は浮月の歌　朴水

汝与翁浮そころすゝ向　里雁

催しゆくと花ふて花を祖父も嗚き　有隣

雅な花家るあとト喚ゝ呼　梅吉

こら千里るゝれぬむ見沙汰ん　なれ

むらくにひくも柳の糸　筆

太短おり

慈父もしかくゝ阪沼東の墨直し
湯を龍しみひ文よろすゑ新阪るゝ
梅ノ路にかくゝ浦里の風ちある世ぬ多く
ちなしれ稚気とい浮んと頼りの郷を

おほとのゝつるを見て七人の安飾と
いのりて折く鶴はいつもあたまのあしこの
姉分ことに寿をまつりく

あぬかわる春と日和の祝神　六井　文柳

名録　四季

芋洗ふ海苔て浪く月今宵　なに

浜路の乾なか滅やまた風　丁山　流

五月雨や新宮かつて紅　三月

秋風の象へ芝てやら鳥や須まま　公乙　家中

気残燈簾よぶらくの篠ひ乍　六井　去歳

水車御なかりく　まのか雨　下ハ

植ても葉殺のおてな夕ぐれ　かと

世の移れ衣くをはなく松の色　鳴さ

秋の他と合せ落へやりふの月　前杜

声に似ねとのや茂やし涼の角　皆に

越つつ子も妻せ鬼菊や堂え重　三楽呼

梅折てりを ゆん寒し鬼け　里雀

蚊やりや らうめ寒き来て飛よ　<ruby>巴丈<rt>公乙</rt></ruby>

きらんへをすして八朔に記捻かや　有隣

軍の祭り陣も千より咲の芦　<ruby>宇乎<rt>六井</rt></ruby>

松風の絶々と海かね鴈月　竹子

蘆折れみどりの果ハ繊られ　桂甫

夕暮れと月當て牛も庭の家　朴志

蓮ばらや入梅の濁も澄み落　<ruby>東亭<rt>幸石</rt></ruby>

里人の声も稀なり合歓の花　文柳

こまひ徳力のお書略

涼しさや右に月見る途ゑ流れ　<ruby>昨花<rt>ホウこ</rt></ruby>

同しく

鶯の声もくまぬかなしつら笛　<ruby>梅于<rt>こうへ</rt></ruby>

文音

風きれ樓ゆうし星月夜　<ruby>吟坊<rt>ろ舗</rt></ruby>

葉のちも枝細吹く月くらく　寄由

須先も晴て霙津の時雨かな　杏種

咲のほる日毎新し立葵　曽流

夜ハ又香たつ匂ひあり梅の花　示也

冬木や雨に狭める車道　文司

山背や魚のうろこの光りみち　梅居

蚊柱やゆら涼むもちと咲せ鬼　種石

落葉たつ枝かしる草卯分　天王 鬼暁

木陰に追ハれて餘の葉之外　可昌

毛宗乃や雪井に投て女丈鶴　巴江

日もくれぬ千歳山や夜木之　升江

紫苑ちり乏しく雲に蛙られ　女 乙紅

下枝よりも濡ぬ風をあつめ時雨　小野 里水

待けるも花の雲し小萩子も　大楽 一可茂

名月やひとうみ行く草の露　推倉 宮升

心路しき海もちり大霰かな　神崎 貴器

鳴源るたきと飛雲の声　石谷 梅兒

雨晴の露ふりけり蘭の雨　城田寺 菜露

水流れ半染る紅葉かれ　栗野 松甫

糸柳や根より穂先の緑まで　里桂

くるくると風に柳の糸細し　推石

一碗の茶にも味ありけふの梅　一叢

春ゝ月の俄みぬ遠山かくる　イシラ樹 文荷

飛ぶにさへ秀句しも霞かれ　乃水

夕栄は石にも色あり枯尾花　去風

晴や机のうへ匂ふ菊　一瓢

なだ露ひ茶に花顔胡蝶かな　柳蛙

笠持ある人は急ぐや夕しぐれ　桂鳥

涼風やうれて白る川鵆ひ　上ノ保 季山

風の吹く岩涼や星の浮き　清水 如柳

夜くるふ海の鳴りけり蜂の雨　素止

啼る音と鳴し帰るこゝろの　李中

気かへひの袖や是何雨い　志太山教門 之芳

梅か下匂ひわするゝ日なれ　ミ須 大雅
山くもに揺をわする雲の宮　耕甫
遠山ハかすむとも見えて小まちか　内藤
浴衣く傘すちりや夜の雪　英司
春風や柳の枝く井戸の形　有尾 松亭
折し浪を誰かも舟を山桜　石畑 竜王
花もちる桜の花かんざし花晴　初川 和川
さかんなる門の別きや赤丈人　淡洋 晒宗

露をまつ春のこえや桜の月　枇杞
むかふ河原く隣のちらぬ花　琢磨
咲きけるか雲を蝶とも見て来た　宇安
柳さや又芳菲を河匂ひ　宜吏
さ枝にれおかきハなよむ袖外　大垣 源元坊

七活

あるのハなとあるゝ野卧兀く風流を
ほころる雨足所ハおもくも衣令ん

えしつらね月もみるを世界浮世の
いとひしるく東西南北に海ならし
海生中にあり郷のかきなく海まとて見て
きらく金波をかけてみるか彼の杓例の
お替を放りして枝頭に錢ま
樹下石上の宗茶話ともなりかも
あつて旅の旅のそ途なくしやまれ

鷸に黄葉をむしに枝草鞋
ゆらしれて程よくむ蕉　萬壺

右浮情

黄ぶきにまかせも春の入満く　僊市
育ても見らぬ浅瀬羅の竿　仲秀
ウ淡やとて翁の月みる冬嗚り　少方
試みるの鷹ゑてもちえれ　無羅
尋ね先キ渡らる由みる濱　超海
貸地流れて身ありとく人　化石
悟るも世界の世帳に気を配り　超界
爲ると油ならさぬ嘘　雙南

内蔵は家の背中まで初桜　桐岢
ちる〳〵彼岸會里八稜ぬ　未童
我むかふかれる笄のひきさし　昉
果報く〳〵と麻て秋と来ぬ　乗
須見て后暁を梅の又さう〳〵　秀
三十日にを紀錦橋の占　市
大りさま敵のあか家嗅ぬ行て　銀
酒と気とに云ふと居汁　方

ものなる月出ぬく〳〵と桜の陰　后
鄙しらぬとえすきとと天吹と　泠
芸夢れよ躁闇老夫れ蚕振蒔て落〳〵　南
論語とやられ吟宝し　恩
見あふ其金透青くむれ鳴　意
継ひ添ふの傑の紛ら　崇
大鳩あれ

名録

雉子啼や伏見の里の朝
瑞布

なへと淀川まあしこもしをみや
少方

あかりさし春の夕青葉哉
其海

枝垂くぬるりの花に風はなし
仲夷

涅槃会の画のうへ火気さし
朴竹

三日月に夜るよりも分かり
宗雅

牛磨し嫁の実 杜若
化石

ちら乗して静たとお沢
松窓

物に風新しき紙
未重

杉の露んで小雨の
雙南

れ卿の秋とやこの人くまで見
られてか箱川のまぎはあふ
古梁坊

盃小ひらりくまれ小鮎かな
曲水まで似なかりし 楼廷
菖雀

ちをて瑞布雉伯の五十に
ひて
古梁坊

都の春も和く水の味

起ハ花の日はくらしけれ　塔市
仏えらん法会たる船中
月のあかり帆に吹かれハ落る　鴎江
須磨
小法の鏡空下そ
橋の音お渡人聞て霧深　坊
米ハ霧もあしや跳ぬ橋　梅古
もし見てこれ声とまって

花に艶あり雨や春陽　左柴坊
色深き葉の落ち　蟻堂
八句表
夢てけ春や鞍馬れ鳴る　蟻堂
やよとよむ藤の下ひ　左柴坊
高竹の鷺も羽安ま　五風
浮世みえてこの神さ　子驕
ゆくと想すゞむ小石川　子風

わかれて酔とさかを桐下　鳥翔
おもひきと嵐や名月今宵　辰壺
早稲田の涼兆ハ先録の塔　松卜

名残

行春やはるく見え笛の塔　五雨
物もてまうら見ゆる家浪りら　子路
秋の夜のうすもみやの石濱　文風
鏡蛸や浜磯もおしもなし　魚鶴

花むかに笠東春ん趣向山桜　店舞
魁ともならぬやはらし松　松戸

須磨の浦にて

月は今ぬし須磨の花も哉　信方
物見や須磨よし旅人の道　花
懐しさもあそて若木の桜哉　古

著子は須磨に来るは古かたしく
宰相して高雄の松左曲とそく

あかれ松ハ兵庫の浦にかゝひかれる
松ハ地を拂てもしむふハ須磨
橋より岸の小松せよふみ風景
同しのくりてしかゝる所に傳ふ兼
猿人こ見れ有りふけられしかのく
さるあれ舞し侍りく

松陰の色なや鳥ハ行きえ寺　坊

兵庫

築し内のむりしかなや雉子の声　九

楠子之墓

志らぬえや芳しさ草の中　坊

播磨

高砂

おもかなをちる松や雪し灘　ち

卯月朔日ハ熊野のゝ詣くを
過行侍てうみに夜ぬのこ床に
宿りれ侍すゝくらかし

吟して経す月句かな

龍郎

素朴のはしとまつまて

夕凡に拍く千やうし茶机　古梁坊

涼う出知れと孫やう月　素朴

龍吟の返留ハ鳥作子か家とあら寺

二階坊く詠見くらひらまて物言れ

うしよいと唯やうし

なとも次第んうみふたもりふ山　古梁坊

冬のこと新筆よ若よるもはし　鳥作

短冊一折

素朴

画龍の落く草文や捨小船

見た顔を抜て派手ぬ子　古渓

奉りぬるせ返るも物いふて　二來

茶飲もそこそこ掛の猿しし　象拙

ウ
月新に柳か京の町ふつき　鳥作

咲そふ隣りの菊をとて歌く　文川

出かはる居を呼くなもは　雨夕

小こくしき蚊の柳笠の　主滴

手拭ひの笛や大鞍とれたし　有隣

明ゆ君の奥座　都国

袖乞によるかくいへともなし　暁東

糸小花りふ笑慕俳諧　筆

名録

夕顔にこの寝れ泊めりぬし　暁東

順礼の高森の旅やちゝ松原　二来

出てゝ八月けへ送りて郭公　都国

涼しめの網しやはかれ臭　雨夕

夕立や流して曇る汗の肌　為作

背小子ゝ雲森さして常ホ　文川

鵜の囲大ゝし棲み久りとし升　文湍

鴨牛おんとはむや笠のか額　有隣

川狩や鮎喰ふ侍て捨草鞋　魚超